

---

# 少女の未来予知宣言

くぼい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少女の未来予知宣言

### 【Nコード】

N4430Z

### 【作者名】

くぼい

### 【あらすじ】

ある日、夏木裕太は隣の席の冬日いろねから、自分は未来予知の能力ができるようになったと告げられる。そのことを信じていなかった裕太だったが、実際に予知どりのことが起きる。

「さよーならー」

今日一日の終わりを告げる声が教室に響き、部活に行く者、すぐには帰らずならだらとお喋りを楽しむ者、クラスメイトはそれぞれ思い思いの行動を始めた。

夏木裕太は放課後に特にやることもなかったもので、さっそく帰ろうと、スクールバックに教科書をつっ込んでいると、

「ねえ、もしも未来に起きることがわかったらどうする？」

隣の席の冬日いろねが、にやにやした顔で訊いてきた。

「え？」

唐突な問いに、裕太は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「未来がわかったら何でもうまくいくと思うのよね。ほら、宝くじを当てて大金持ちになったりとかさ。あー、そうだったらどうしよう」

いろねはうつとりしたような表情で続けた。裕太はいろねをまじまじと見つめ、

「おまえ、どうしたんだ？ 現実逃避か」

「違う違う。私、実際そんな超能力者がいてもおかしくないと思うの」

「保健室行ってこい。テスト勉強しすぎて頭がヒートアップしちまってるよ」

「私の頭はいたって通常運転よ」

そう言って、いろねは腕を組んだ。なぜ、そんなことを訊くのだろうか？ もしかして何か裏があるのではないか、と裕太が怪しみ始めると、

「で、どう？」

「どっつて？」

「だから、もしも未来予知ができれば」

裕太は少しの間考え、

「朝出かける前に今日は雨降るのかどうかかな」

「ちっちゃい！ どうしてあんたは、そんな夢のないことしか言わないの」

いろねは口を尖らせた。

裕太はスクールバックをつかみ、「そんな非現実的なこと考えてる余裕は、俺にはないんだよ。明日のテストのことで頭がいっぱいな。じゃあ」と、立ち上がり帰ろうとする。

「待ってよ」

まだ何かあるのかと、気怠くふりかえった。いろねは何やら悩ましげな表情で、机に視線を落としている。そして、

「わたし、未来が予知できるようになったの」

なんとつまらない冗談を、と裕太は思った。そんなことを訊いて、「なんだって」と信じてくれる人はいないだろう。小学生だって鼻で笑うと思う。

「まだ、続けるのかよ」

「本当なの」

そのあまりに深刻な響きに、裕太は思わずはっとしてしまふ。いろねはどんなときも元気で、常に笑顔を絶やすことはなかった。しかし、今のいろねの表情は、今まで裕太が見たこともない深刻なものだった。

裕太は、ちよつと話に乗ってやってもいいかな、と思った。特に何もやることのない放課後の暇つぶしくらいにはなるだろう。

「本当かよ？」

いろねは顔を上げ裕太を見つめると、

「うん。初めて未来がわかるようになったのは一昨日だったの。最初はなんとなく、今日はこんなことが起こる感じがするな、くらいだったんだけど今はもう完全。全部わかっちゃう」

そして眉根を寄せた。

「ちよつと気持ち悪いのよね。本当に自分にこんな力がついちゃう

と」

いろねはこれで本当に騙せると思っているのか。

裕太を信じ込ませたところで、「ははっ、信じてやんの」と指差しながら大笑いする姿が容易に想像できた。

甘い、甘すぎるぞいろね。俺も低くみられたものだ。

少し癢に障ったので、裕太はからかってやろうと、

「じゃあ、何か予知してくれよ」

さあどうする、と裕太は少し得意げな表情をする。これくらいの問いを投げかけられることくらい織り込み済みのはずだ。さて、どうする。

いろねは、「いいよ」と簡単に頷いてみせ、じっと裕太を見つめる。

「うーん」と唸り、眉間にしわを寄せた。そして、びしっと裕太を指差し、

「今日、あんたの下駄箱にラブレターが入ってるわ」と仰々しく宣言した。

「……」

予想外の答えに裕太はしばし固まる。そして、

「そんなことあるわけないだろ」

と笑い飛ばした。なにせ約一年半の高校生活、モテたためしなんか全くないのだ。そんなことあるはずがないのは自分が一番よく分かっている。今のはちよつと面白かったぞ。

いろねは教室の時計を見上げ、

「あつ、もうこんな時間。私部活行くね」

椅子から立ち上がり教室から出ていこうとする。裕太は慌てて、

「お、おい」

と声をかけたが、いろねは慌ただしく教室から出ていってしまった。

教室に取り残された裕太は、一人ため息をついた。

一体いろねは何がしたかったのだろうか。これは彼女なりのギャ

グだったのだろうか。全く分からない。

釈然としない気持ちのまま、裕太も教室を後にした。

裕太は下駄箱の扉に手をかけ、はたと手を止めた。

ラブレター……。

嘘だとわかっていても少し期待してしまう自分がいた。そんな自分に内心で苦笑しつつ、ロッカーの扉を開け、

思わず息を呑んだ。

入っていた。

可愛らしいピンク色の便箋が。

恐る恐るそれを手に取ってみた。心臓が早鐘を鳴らしている。くっくと生唾を飲み込んだ。

便箋には可愛らしい丸っこい文字で「夏木裕太様へ」と書かれていた。

そこでふと我に返り、あたりを見回した。いろねがどこかに隠れ、ラブレターを手にどぎまぎしている裕太を見て、くすくす笑っているのではないかと思ったからだ。

しかし、あたりには下校する生徒が数人いるだけだった。

裕太はしばし便箋の文字を見つめて固まった。

もしかして、これはいろねが入れたんじゃないか。

そんな考えが浮かんでくる。

未来を予知できるという嘘のためにわざわざこんなことまでするなんて、意外とあいつも暇なんだな。

裕太はうすら笑いを浮かべ、いろねの偽造ラブレターをズボンのポケットに突っ込んだ。

「なにぼつつとしてるの」

「うん？」

後ろから声をかけられ、いろねは上の空で振り返った。テニス部の中で一番仲のいい春野みなみだった。

「さつきからずっとじゃん。何かあったの」

そこでいろねはやっと、今は部活中だったことを思い出した。テニスコートでは三年生の部長と副部長が練習試合をしている。

「ううん。別に何も無いよ」

いろねは焦って否定したが、みなみはそんないろねの表情を見逃さなかった。

「怪しいな」

疑いの目を向けてくる。

「本当だつて。さあ、部活部活」

いろねは苦笑いを浮かべ、その場から逃げるために球拾いに向かった。

気がつかないうちに、長い間ぼうつとしていたようだ。集中しようと思っても、ある光景が頭に浮かんできて、すぐに脳内を支配してしまうのだ。

今日の昼休みの時間だった。

昼食を買いに購買へ向かっている途中、下駄箱の前で二年生の下駄箱の前でうろうろしている女子二人を見かけた。

いろねは、何をやっているんだろうとは思ったがそのまま通り過ぎようとすると、

「春菜あつたよ。夏木先輩の下駄箱ここ」

という声が飛び込んできた。いろねは裕太の名前を聞き、ぴたと足を止めた。裕太の下駄箱に何の用なんだろうか。壁に身を隠し、いろねは少し様子を窺うことにした。

女子二人の背の低い方が、裕太の下駄箱を開け、手に持ったピンク色のものを入れようとしていた。

あれは手紙？

いろねは急に心臓の鼓動が速くなるのを感じた。

ラブレターだ。すごいところを目撃してしまった。

女子二人は下駄箱を閉め、足早に去って行ってしまった。その時

に、ラブレターを入れた女子の顔が見えたが、心なしか恥ずかしそうに手を胸の前に組んでいた。

未だ興奮したまま、いろねは下駄箱に近づいていった。裕太とは高校入学から同じクラスだが、モテているところを見たことがなかった。むしろ、まったくモテないと言っている。だから驚きを隠せなかった。

裕太の下駄箱の前で、ラブレターを確認してみようかなというねは思った。ちよっとくらいならいいだろう。

そして、腕を伸ばしかけて思いとどまった。

これはいけないなというねは思った。先ほどの女子の様子からみて、相当の勇気を振り絞ってラブレターを書いたのだろう。それを裕太より先に見てしまうのは違うような気がした。

いろねはくるりと下駄箱に背を向け、歩きだした。途中あることを思いついた。

そうだ、未来予知……。

いろねは不敵な笑みを浮かべ、早足で購買へと向かった。

気がつくとき、いろねはまたぼうっとしていたようだった。

ちらりと横目でみなみの様子を窺うが、先輩たちの試合に夢中なようであるねの様子には気づかなかった。

裕太はどうしたのだろうかというねは思った。ラブレターには「放課後教室で待っています」とか書かれていて、教室に行ってみると告白が始める。それで裕太はどうするのか。

あの二年生の女子は結構可愛かったし、性格もよさそうだったし、もしかして付き合い始めるかもしれない。

いやいや、いくらなんでも初めて会った人と付き合いたりはしないだろう。

いやでも……。

そんな考えがいろねの頭の中を支配していった。

いろねはそんな自分に驚いていた。どうしてこうも裕太のことが

気になるのか。

仲の良い友達が幸せになることは喜ばしいことではないか。それなのにどうして……。

もしかして自分は裕太のことを。

「次、いろねの試合だって」

みなみの声で思考が中断された。

「あ、うん」

いろねはラケットを手に取り、コートに向かった。その背後で「やっぱり何かおかしいよな」とみなみが呟いたことには気づかなかった。

こんな精神状態では試合には集中できるわけがなく、結果は散々足るものだった。

翌日登校すると、いろねが席に座り、机に肘をつけて外を眺めていた。裕太はその姿を見てにやりとほくそ笑んだ。

「よっ、おはよう」

裕太が声をかけると、いろねはびくつと身体を震わせ、こちらに振り返った。

「あっ、お、おはよう」

いろねはせわしなく視線を動かしている。そんなに驚いたのか。

裕太は席に腰を下ろすと、早速例の話題を切り出した。

「昨日の未来予知の話だけどさ、当たってたぞ」

「ね、言ったとおりだったでしょ。私には能力があるのよ」

そういつて、視線をまた外に移した。

「それで、どうだったの」

「それがな、なんか教室に呼び出されて告白されちゃってよ」

「ふーん、オツケーしたの？」

心なしかいろねの声が少し低くなっているように感じられた。裕太は自分のにやけ顔を押さえることができない。

「もちろん、オツケーしたよ。相手の子可愛かったし」

すぐに何らかの反応があるものかと思っていたが、いろねは校庭を見つめながら固まってしまった。

裕太がどうしたのかと声をかけようとした瞬間、くるっとこちらに顔を向け、

「よかつたじゃん、おめでとう」

と満面の笑みで言った。

「羨ましいなーこのやろう」

そう言っただけで裕太の肩を叩いた。

「ぶっ」

裕太はとうとう我慢できなくなって吹き出してしまった。

「何よ」

いろねはいぶかしげな表情をした。

「いや、本当に信じてるからさ」

「どういふこと」

「ラブレターの話だよ」

いろねは全く意味がわからない、といったような表情で裕太を見つめている。

「ラブレターなんかなかったんだよ」

「えっ」

いろねは間抜けな声を出して、目を満丸にした。

「だって、確かに下駄箱に手紙を入れてたわよ」

「おいおい、自分で自分の嘘を暴露してるぞ」

「そんなこと、もうどうだっていいの。入っていないはずがないわよ」

「まあ確かに手紙は入ってたんだけど、中身はお礼の手紙だったんだ」

「お礼の手紙？」

「そう、一昨日の休み時間だったんだけど、廊下でうずくまってる女子がいてさ。どうしたのって訊いたら、貧血ですって言うから保健室まで連れて行ってあげただけけど、そのお礼の手紙だったんだ」

今どき律儀に偉いよな」

いろねは何も言わずに固まってしまった。裕太が、怒ってしまったのかと心配だしたとき、

「何だ、そういうことか。なんでそんなウソつくのよ」

と裕太の足を蹴っ飛ばしてきた。

「お前が未来予知なんて嘘つくからだよ。そのお返し」

裕太はにっこり笑った。いろねは「もー、ひどい」と口を尖らせ、今度は裕太の頭にチョップをしてきた。

「でも、本当のラブレター貰いたいよ」

「あなたなんか一生もらえるか」

いろねはぷいっとそっぽを向いてしまった。

「そんなに怒るなよ」

完全に怒ってしまったようだ。自分だって嘘をついたくせに、と裕太は心の中で毒づき、ジューズでもおごってあげないといけないなと苦笑いを浮かべた。

裕太は、いろねがひそかに安堵の笑みを浮かべていることには気づかなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4430z/>

---

少女の未来予知宣言

2011年12月15日02時49分発行